

## 岐阜県立多治見工業高等学校所蔵の近代陶磁器資料について —年号が付記された製品を中心に—

立花 昭

Modern ceramics as reference material collected by Tajimi Industrial High School  
- Focusing on items with labeled information of production year

TACHIBANA Akira

### 要旨

岐阜県博物館では、岐阜県立多治見工業高等学校所蔵の陶磁器資料37点を保管しており、このうち9点は江戸後期から明治時代に製作されたものである。筆者は、平成22年に公益財団法人ポーラ美術振興財団の助成を得て、同校所蔵の約1,600点におよぶ近代陶磁器資料の悉皆調査をおこない、報告書を作成した。しかし、調査対象の範疇にある当該保管資料は、そこに含まれていない。よって、この資料を追補するとともに、前回の調査で重要性を明らかにした、年代のラベルを伴う製品が新たに5点確認されたため、これらを含めて資料の意義を再検証する。

### はじめに

明治政府は近代的な産業に従事し得る者の教育のため、明治27年(1894)に実業教育費国庫補助法を施行し、これを契機に全国各地で工業学校をはじめとする実業学校が開校していく。岐阜県立多治見工業高等学校<sup>1</sup>の前身となる岐阜県陶磁器講習所も、こうした流れを受けて明治31年(1898)に創立し、美濃焼産業の近代化に大きく寄与するものとなった。

同校では、設立時から戦中にかけて教員や生徒の制作に資するよう、国内外で作られた陶磁器の参考品が収集されており、今日のようにカラー図版の書籍などが普及する以前において、重要な役割を果たしていた。こうした参考品やそれらに基づいて作られた試作品については、平成22年(2010)に公益財団法人ポーラ美術振興財団の助成を得て、同校の協力のもと筆者が共同研究者代表となって悉皆調査をおこなっている。その結果、約1,600点の製品を確認し、これに関する報告書<sup>2</sup>を作成して全容を示した。

ただし、同校所蔵の陶磁器の一部が昭和51年(1976)より岐阜県博物館で保管されており、先の調査から漏れていたことが判明した。このうち、江戸後期から明治時代の陶磁器製品は9点を数え、資料の総数からすれば決して多くはないものの、後述する年号が記されたラベルを伴う製品(以下「年号資料」という。)も含まれていたことが注目される。よって本稿では、当該資料を追補し、さらにこの年号資料について、新たに確認された製品と既存のものを併せながら改めて検証していくこととする。

### 博物館で保管された近代陶磁器

この保管にいたる経緯については判然としないが、岐阜県博物館の開館が昭和51年5月5日、保管の開始が同年3月24日であることから、博物館のオープンを機におこなわれたことは明らかである。全9点(図1, 図5, 図15, 図20, 図26, 図27-30)の内訳について、産地は美濃産8点、肥前産1点、時代は近世(江戸後期)2点、近代(明治)7点、器種は徳利3点、鉢類2点、蕎麦猪口・煎茶碗2点、洋食器(カップ&ソーサー)2点、絵付技法は手描き6点、摺絵1点、銅版転写2点、そして年号資料は5点であり、報告書に掲載された資料群との乖離はみられない。これらを踏まえると、近代の美濃における代表的な窯を営んだ西浦圓治(五代1856-1914)と加藤五輔(1837-1915)の製品を含めながら、器種や技法などが分散するように考慮して選択されたようである。そして年号資料については、割合からみて意識的に選んだ可能性も考えられる。

### 年号資料について

同校所蔵の年号資料は、今回確認した5点と、報告書に掲載された94点にのぼり、すでに以下の点について言及している。

- ・ラベルに記された年号は、貼付されている製品の製作年を示しており、信憑性が高い
- ・いずれも美濃焼製品である
- ・陶器商だった加藤助三郎(1856-1908)によって収集され、同校に引き継がれたものである
- ・製品の選定にあたっては無作為に抽出するのではなく、

多くの場合、例えば革新的な技法が確立した直後にそれを使って製作されたものなど、何らかの理由に基づいて意図的に選んでいたようである

上記を踏まえながらこの年号資料を改めて評価すれば、通常、紀年銘資料<sup>3</sup>を除くと量産品の正確な製作年を知ることは難しいため、非常に有益な情報が個別に得られたといえる。そのうえで全体を俯瞰することにより、美濃焼の意匠や技法の年代的な変遷を辿ることも可能となる。さらには、このような資料群は全国的にみても稀であり、極めて貴重な存在として位置付けられる。

なお、これら年号資料の収集については上記のとおり、学校が主体的におこなったのではなく、現在の多治見市市之倉出身で、陶器商として手広く商売し、同校の設立にも尽力した加藤助三郎<sup>4</sup>が関わっていた。その根拠として同氏の履歴書<sup>5</sup>に、「明治三十八年五月長崎宮内省調度課長視察トシテ来店サレタルニ付明治元年ヨリ全三十八年迄毎年ノ美濃焼ヲ観覧ニ供シテ其進歩ヲ説明シ」、さらに「同年同月明治元年ヨリ全三十八年迄毎年美濃焼標本土岐郡立陶器学校ノ需ニ依リ取り揃ヘテ送ル」と具体的に記述されている。

以下に、年号資料のなかから今回の製品と調査済みの主要なものを取り上げ、改めて美濃焼の技術的な進展について、近年の新たな見解なども加味しながら順に記すこととする。

#### 染付山水文蕎麦猪口（明治元年，図1）

博物館保管。美濃では文化・文政年間（1804-17, 1818-29）頃、新たに磁器の焼成が可能となるものの、器形や文様は一日の長のある肥前磁器を踏襲していた。本作や「染付雲気文奈良茶碗」（明治元年，図2）、「染付矢筈文蕎麦猪口」（明治2年，図3）より、明治初期にいたっても肥前磁器のスタイルが暫時、継承されていた様子が窺える。この時期の染付にも前代より引き続き山呉須が使用されており、やや黒味を帯びた色合いを呈している。

#### 染付草花文盃（明治5年，図4）

青色の草花文様は、この当時美濃で一般的だった染付ではなく、器面に対してやや凸となった特殊な加飾技法による上絵付で描かれている。これは、猪口絵といわれるもので、器面に接着液で絵を描いたのち、ガラス質の青粉を振り掛けて装飾した<sup>6</sup>といわれる。江戸から明治にかけて土産物の絵付けに多用されており、シーボルトのコレクション<sup>7</sup>などにも江戸絵付による同技法の盃がみられる。

#### 染付草花文徳利（明治6年，図5）

博物館保管。頸部に一段設けた徳利で、胴部に染付で草花を描いている。同型の「白磁徳利」（明治6年，図6）も存在していることから、収集時に一対で取り揃えられた可能性が高い。当時の美濃製品の加飾は染付が主流であったが、これとは別に白素地のまま出荷され、東京などで上絵付けされることもあった。年号資料のなかにも白素地が複数みられるように、この頃、相当数の供給がなされていた。

#### 染付蝙蝠文煎茶碗（明治8年，図7）

染付によって蝙蝠が描かれたもので、中国では蝙蝠の「蝠」は「福」と音が通じることから吉祥文とされている。この頃から染付の発色が濃く鮮明になっており、山呉須に代わって酸化コバルトが使用されたことがわかる。肥前・有田の松村九助は、明治7年（1874）に輸入品の酸化コバルトを大量に買い占め、その後、名古屋を拠点に美濃や瀬戸などに売りさばっていた。本作は、この絵具が量産品の染付に汎用されていくことを証するものといえる。

#### 青磁花籠文小皿（明治10年，図8）

伝統的な青磁の技法を用いたものでなく、酸化クロムの呈色によるため若草色の明るい色味となっている。酸化コバルトが美濃に伝わった経緯は先述のとおりであるが、酸化クロムについては現在のところ判然としない。ただし、酸化コバルトの導入後わずかな期間で使用され始めたことがこの製品から明らかとなった。年号資料には、「青磁煎茶碗」（明治13年，図9）、青磁富士山形皿（明治29年，図10）、青磁馬文小皿（明治38年，図11）など各時期に酸化クロム青磁の製品が認められる。そして、消費地でも例えば東京都品川区の妙国寺北遺跡から出土した近代陶磁器<sup>8</sup>では、染付製品に次いで多くみられることにより、一定量の需要があったといえる。なお、器面の花籠などには白泥による花卉や、緑、黒の上絵付が施されており、年号資料のなかで同種の上絵付は初出となるが、実際は、多治見でそれ以前の明治初年頃よりおこなわれていたとされる。

#### 染付草花文徳利（明治15年，図15）

博物館保管。染付によって胴部の上半分に草花を、その下に間道文風の文様を描いている。年号資料のなかで徳利は時期を選ばずに登場する器種であり、本資料と「染付山水文徳利」（明治10年，図12）、「染付草花文徳利」（明治12年，図13）、染付山水文徳利（明治15年，図14）などを比較すると、文様の簡略化される様子などがよくわかる。手描きの絵付けをおこなうには、ある程度の熟練が必要で、さらに個々の技量の差が生じるため大量生産には向かず、美濃ではこれ以降、絵付けにおける量産

のための技法が次々と確立されていくこととなる。

#### 摺絵染付雲鶴文徳利（明治16年，図16）

染付による文様が従前の手描きに代わって、染色の捺染を応用した摺絵の技法を用いて加飾されたもの。近代における摺絵は明治15年（1882）頃、現在の多治見市脇之島の上田幸右衛門が伊勢・白子から型紙職人の長谷川久之助ら3人を招聘して型紙を作らせたことが始まりとされる。本作は、この技法が伝わった直後に作られたものであり、初期の作ながら稚拙さは感じられない。

#### 白磁カップ（明治15年，図17）

エッグシェル（卵殻手）といわれる薄手のカップで、鑄込みによって成形されている。この技法自体は明治6年（1873）のウィーン万国博覧会に随行した納富介次郎ら伝習生によって国内に伝えられており、美濃では同17年（1884）に現在の土岐市妻木町の水野勘兵衛が伏せ焼による薄手の白磁カップを完成させたことが知られている。幕末以降、ジャポニズムの影響で花瓶などの美術品や調度品が数多く輸出されるなか、この頃になると下火となりはじめ、買い替え需要のある洋食器にシフトすべきとされた時期に当たる<sup>9</sup>。

#### 銅版染付小皿（明治21年，図18）

下絵銅版転写については、明治21年（1888）に現在の土岐市土岐津町高山の深萱惣助らが、京都でこの技術を研究していた五十嵐健二を招いて試みたが完成をみずに中断。さらにその年、多治見の加藤元次郎、加藤米次郎らがこれを聞いて、名古屋から銅版彫刻師を招き、後に岐阜県陶磁器講習所の嘱託講師となる太田能寿とともに完成させた。本作も摺絵のときと同様に技法の完成直後の作であり、絵付けのクオリティは高い。なお、この技法は明治21年に、太田能寿と加藤元次郎の連名によって特許が出願されており、翌年に特許第773号の「転写紙」に関するものとして取得された<sup>10</sup>。

#### 赤絵銅版花筏文小皿（明治28年，図19）

上絵（赤絵）銅版転写は、下絵銅版転写の技法を上絵付に適用したものであり、明治28年（1895）に多治見の加藤小三郎が考案した。本作についても技法の完成時と重なり、なおかつ器面にみられる「多東舎」は、加藤小三郎の窯の屋号を示していることから、本人の作であることが確認できる。

#### 染付花鳥図徳利（明治28年，図20）

博物館保管。轆轤成形ののち胴部を8つに面取りしており、円筒形以外のヴァリエーションが増えた。このころには、摺絵に代わって銅版転写による絵付けが主流と

なっている。ただし、量産化が進むにつれて粗製品も目立ち始め、初期の銅版の絵付けに比べ、繊細さに欠ける面もある。

#### 釉下彩東下り図徳利（明治33年，図21）

青、黒、ピンク、黄の4色からなる釉下彩によって絵付けされた徳利。美濃においてこの頃、西浦圓治が釉下彩を用いた作品を作り始めたことが知られている。これは当時最先端の絵付け技法であり、東京の加藤友太郎（1851-1916）や井上良斎（二代1845-1905）、横浜の宮川香山（初代1842-1916）らも相前後して自身の制作に取り入れていた<sup>11</sup>。また、海外ではデンマークのロイヤル・コペンハーゲンなどが手掛けて<sup>12</sup>、万国博覧会を舞台に洋の東西で鎬を削る状況となっていた。ちょうど岐阜県陶磁器講習所の開校直後の時期に当たり、同校でも研究していたことが試作品などからわかる。当初は特別な技法であったものの、次第に汎用されていく様子が、「釉下彩同心円文奈良茶碗」（明治38年，図22）、「釉下彩松鶴図湯呑」（明治41年，図23）、「草花文小鉢」（明治43年，図24）などから見て取れる。

#### 石版赤絵人物図小皿（明治34年，図25）

明治34年（1901）に多治見の小栗国次郎が石版転写を実用化し、その直後に作られたもの。平版による石版印刷を応用しており、写真風の絵付けも可能とした。ただし、摺絵から漸次銅版転写へと移行したときのような状況はみられず、その後も銅版転写は昭和前期を通じて主流をなしていた。

#### 銅版染付スープカップ&ソーサー（明治35年，図26）

博物館保管。コーヒーカップと異なり、ハンドルが一对をなすスープカップとそのソーサー。銅版転写によって唐草の輪郭を描き、その内側に手描きで濃淡のダミを施している。また、高台内も銅版染付で「西浦製陶所造」銘を有しており、当時、高級品とみなされていた西浦焼であることがわかる。同窯の絵付けは一般に手描きを主体としているが、本作のように輸出用洋食器の需要に応えるべく銅版転写を用いて効率化を図っていた。

#### おわりに

ここで取り上げた近代陶磁器資料は、「タイムカプセルによって現代に伝えられたものである」と、かつて述べたことがある。参考品や試作品としての役割を終えた多くの陶磁器は、近年にいたるまで、長きにわたり学校の倉庫の片隅で埃をかぶって保管されていたためである。この存在は、一部の教員以外には知られておらず、当然、顧みられることはなかったと考えていたが、少なくとも岐阜県博物館の開館時には、展示資料になり得る

との認識がもたれていたことが新たにわかった。

そして、1,600点を超える陶磁器資料のなかでもとりわけ重要な意味を持つ年号資料については、報告書の刊行後に各所で展示され、図録等に取り上げられることもあり、さらには近代遺跡の発掘調査担当者から問い合わせを受けるなど注目度は増している。このような状況下で、今回5点の新たな年号資料を追加できたことにより、近代における美濃焼の生産状況がより鮮明になったといえるだろう。

### 参考文献

『多治見市史 通史編下』多治見市，1987年

### 註

<sup>1</sup> 岐阜県立多治見工業高等学校は、明治31年（1898）に岐阜県陶磁器講習所として現在の土岐市土岐津町に創立し、同33年（1900）土岐郡立陶器学校、同41年（1908）岐阜県土岐郡立陶器工業学校に改称、大正2年（1913）多治見に移転し、同12年（1923）岐阜県土岐窯業学校、翌年に岐阜県多治見工業学校、そして昭和23年（1948）に現在の校名となった。

<sup>2</sup> 『公益財団法人ポーラ美術振興財団 平成22年度調査研究助成事業 岐阜県立多治見工業高等学校所蔵の近代陶磁器資料の調査研究』研究代表者 立花昭、佐野素子、手島敦，2011年

<sup>3</sup> 陶磁器の場合、製作年を成形時に直接刻んだり、絵付けの際に記す場合が多い。

<sup>4</sup> 加藤助三郎は現在の多治見市市之倉に生まれ、美濃や東京などを拠点とした陶器商。明治5年（1872）に16歳で東京深川に陶磁器卸販売店を開業、同10年（1877）には同業者と東京・日本橋に濃栄社を、同22年（1889）満留寿の名を継承して京橋に陶磁器卸問屋を設立。海外輸出への販路開拓、陶磁器の鉄道輸送などを積極的に推し進めるとともに、岐阜県陶磁業組合長や東京陶器問屋組合会頭を歴任。岐阜県陶磁器講習所の設立の意見書を県や郡に送り、開校のきっかけもつくった。

<sup>5</sup> 加藤助三郎が緑綬褒章を受けるため、明治40年（1907）3月に作成された履歴書の控えが残されている。

<sup>6</sup> 高木典利「東京の陶磁器」『近代陶磁』第20号，近代国際陶磁研究会，2019年，p. 16

<sup>7</sup> 『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』青幻舎／国立歴史民俗博物館，2016年，p. 120には、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト（1796 - 1866）の残したコレクションのうち、美濃産とされる素地にこの絵付けによる「金地藍彩日本名所図盃」が掲載されている。

<sup>8</sup> 『妙国寺北遺跡 一品川区立城南小学校校舎改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』品川区教育委員会／国際

文化財株式会社，2019年

<sup>9</sup> 花井久穂「〈美術品〉から〈日用品〉へ 一明治十八年蘭糸織物陶漆器共進会一」『近代陶磁』第10号，近代国際陶磁研究会，2009年，pp. 9-11

<sup>10</sup> 独立行政法人工業所有権情報・研修館 特許情報プラットフォームより

<sup>11</sup> 立花昭「日本における釉下彩について 高火度顔料を中心に」『魅惑の北欧アール・ヌーヴォー 塩川コレクション ロイヤル コペンハーゲン・ビング オーグレンダール』岐阜県現代陶芸美術館，2011年，pp. 156-158

<sup>12</sup> 塩川博義「パリ万国博覧会を魅了した高火度磁器の釉技「多色の釉下彩」と「結晶釉」」『アール・ヌーヴォーの装飾磁器 ヨーロッパ名窯 美麗革命！』岐阜県現代陶芸美術館，2015年，pp. 10-13

### 図版凡例

各作品のキャプションは、番号、製品名、産地（国、地域）、製作年、サイズ（H＝高さ、MD＝口径、FD＝高台径）の順に記した。

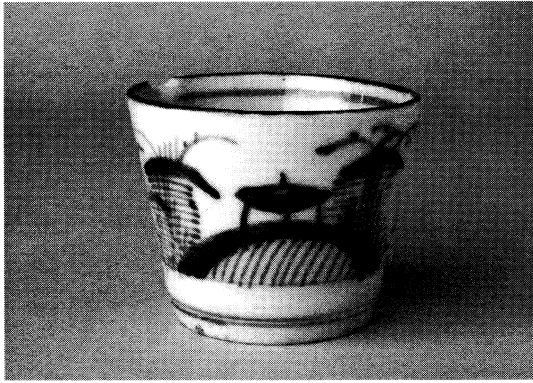


図1 染付山水文蕎麦猪口  
日本 美濃 19世紀後期(明治元年)  
H: 5.9 MD: 7.2 FD: 5.1

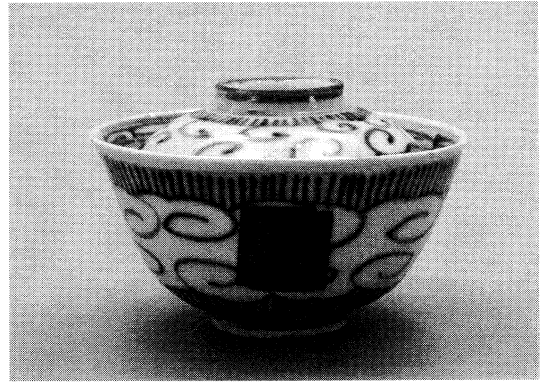


図2 染付雲気文奈良茶碗  
日本 美濃 19世紀後期(明治元年)  
H: 6.8 MD: 10.5 FD: 3.8



図3 染付矢筈文蕎麦猪口  
日本 美濃 19世紀後期(明治2年)  
H: 5.3 MD: 6.9 FD: 4.9



図4 染付草花文盃  
日本 美濃 19世紀後期(明治5年)  
H: 2.8 MD: 6.2 FD: 2.5

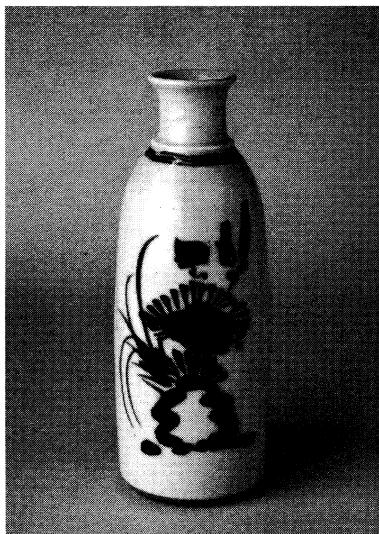


図5 染付草花文徳利  
日本 美濃 19世紀後期(明治6年)  
H: 17.4 MD: 3.2 FD: 5.5

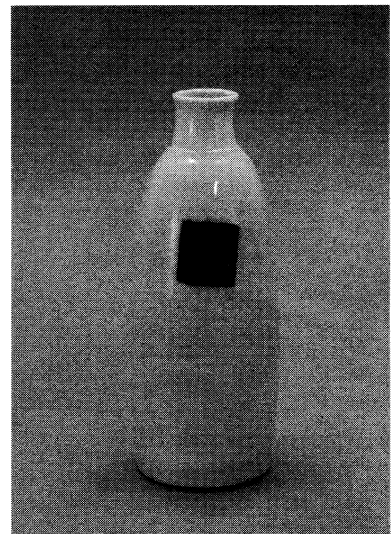


図6 白磁徳利  
日本 美濃 19世紀後期(明治6年)  
H: 17.1 MD: 2.7 FD: 5.7

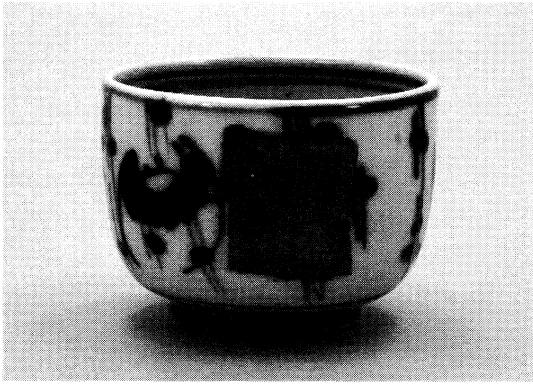


図7 染付蝙蝠文煎茶碗  
日本 美濃 19世紀後期(明治8年)  
H:4.5 MD:5.9 FD:3.3

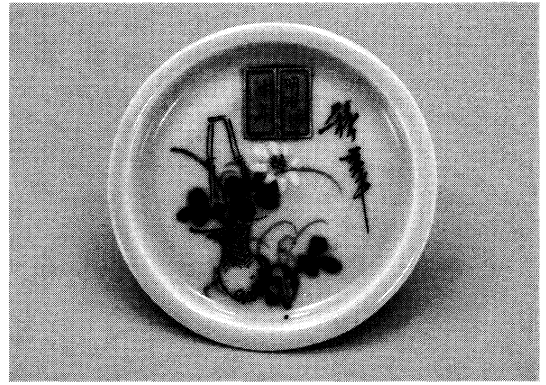


図8 青磁花籠文小皿  
日本 美濃 19世紀後期(明治10年)  
H:1.7 MD:11.4 FD:6.2

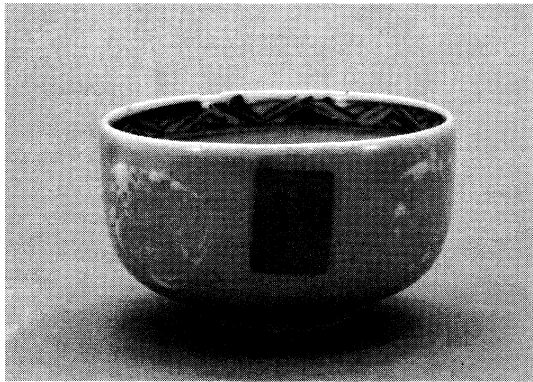


図9 青磁煎茶碗  
日本 美濃 19世紀後期(明治13年)  
H:5.3 MD:8.6 FD:3.7

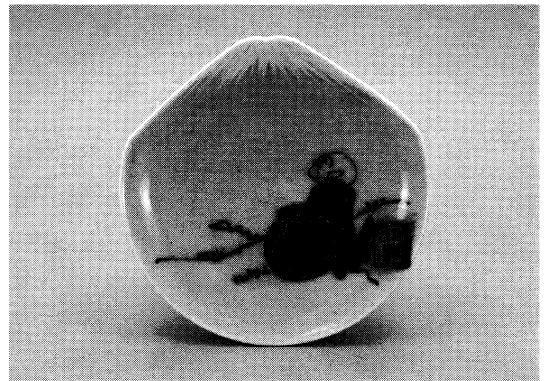


図10 青磁富士山形皿  
日本 美濃 19世紀後期(明治29年)  
H:3.1 MD:16.8×17.0 FD:7.9

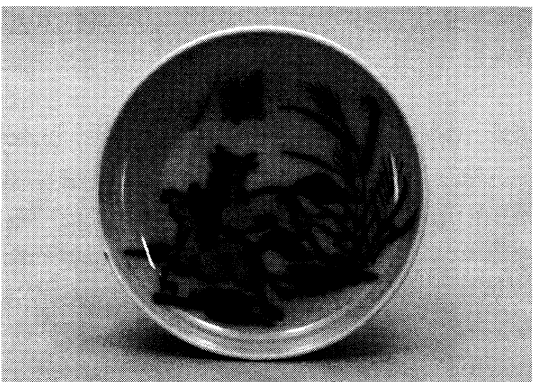


図11 青磁馬文小皿  
日本 美濃 20世紀前期(明治38年)  
H:2.9 MD:13.9 FD:7.6

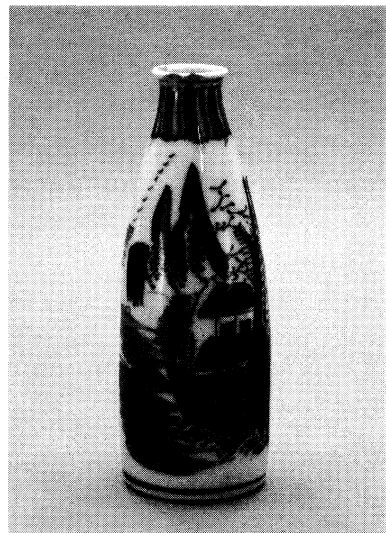


図12 染付山水文徳利  
日本 美濃 19世紀後期(明治10年)  
H:18.3 MD:3.1 FD:5.9

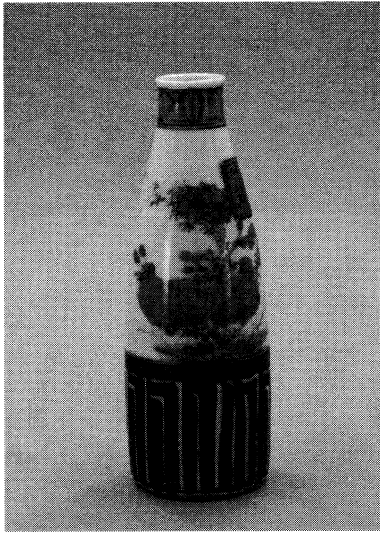


図13 染付草花文徳利  
日本 美濃 19世紀後期(明治12年)  
H:18.3 MD:2.9 FD:5.7

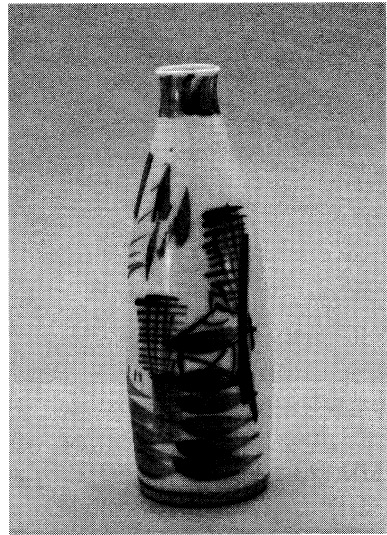


図14 染付山水文徳利  
日本 美濃 19世紀後期(明治15年)  
H:17.2 MD:2.3 FD:5.2



図15 染付草花文徳利  
日本 美濃 19世紀後期(明治15年)  
H:18.4 MD:3.2 FD:5.9

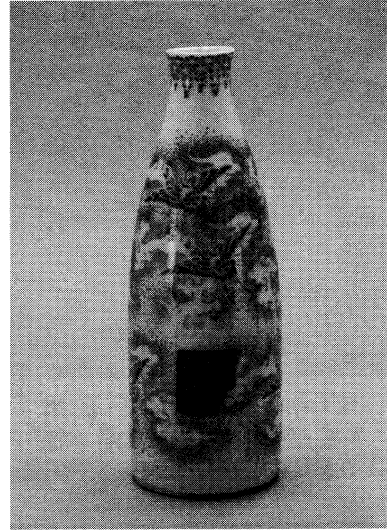


図16 摺絵染付雲鶴文徳利  
日本 美濃 19世紀後期(明治16年)  
H:17.7 MD:2.7 FD:5.9

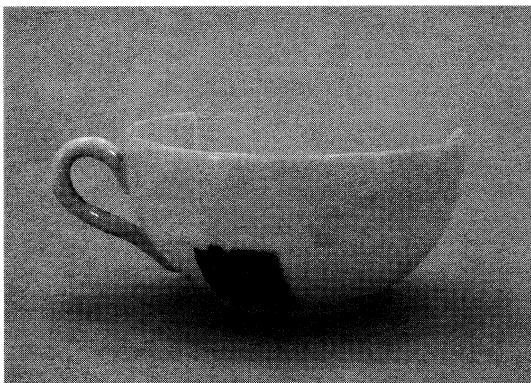


図17 白磁カップ  
日本 美濃 19世紀後期(明治15年)  
H:4.9 MD:9.3 FD:4.1

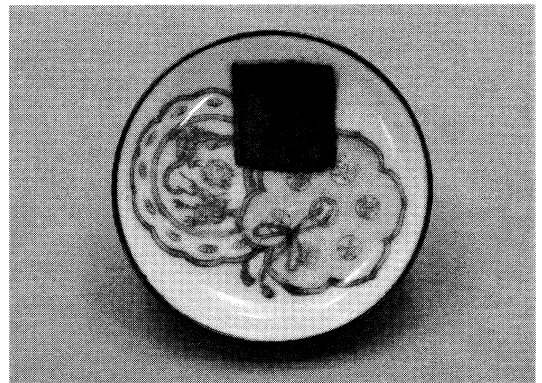


図18 銅版染付小皿  
日本 美濃 19世紀後期(明治21年)  
H:1.5 MD:7.6 FD:4.6



図 19 赤絵銅版花筏文小皿  
日本 美濃 加藤小三郎 19世紀後期(明治28年)  
H:2.2 MD:12.2 FD:7.4

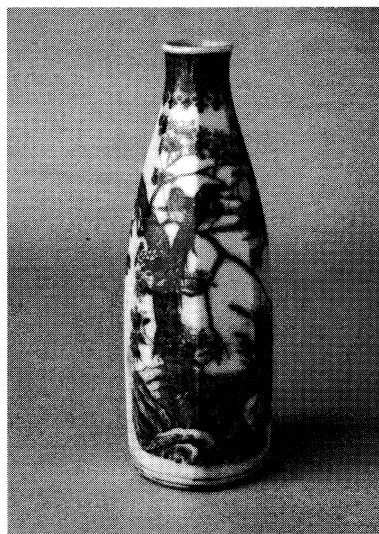


図 20 染付花鳥図徳利  
日本 美濃 19世紀後期(明治28年)  
H: 18.4 MD: 2.8 FD:5.7

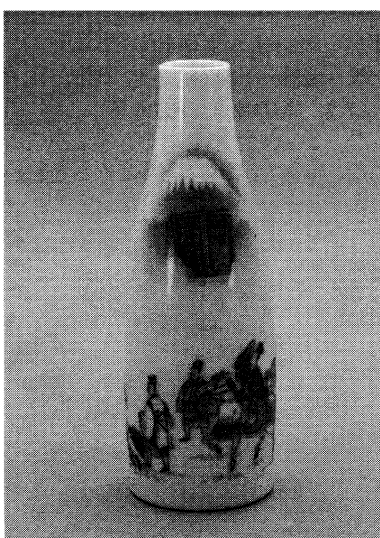


図 21 釉下彩東下り図徳利  
日本 美濃 暉秀 19世紀後期(明治33年)  
H:18.1 MD:2.8 FD:6.0

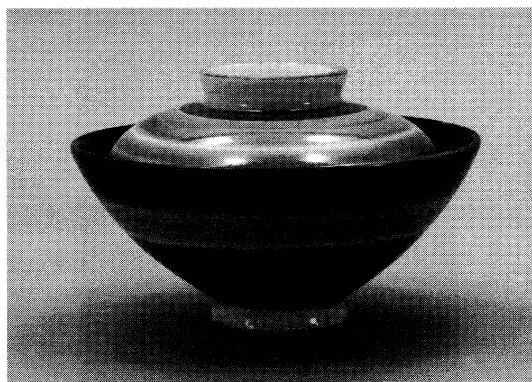


図 22 釉下彩同心円文奈良茶碗  
日本 美濃 20世紀前期(明治38年)  
H:7.1 MD:11.4 FD:3.7

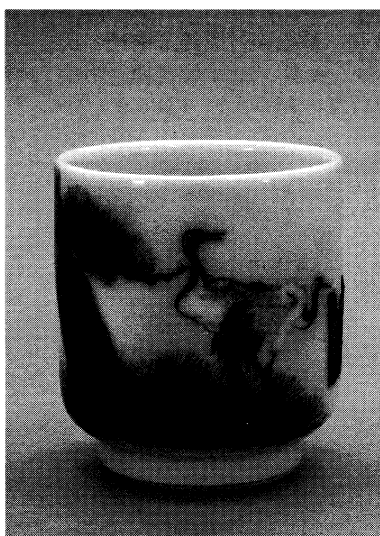


図 23 釉下彩松鶴図湯呑  
日本 美濃 芳山 20世紀前期(明治41年)  
H:8.5 MD:7.5 FD:5.0

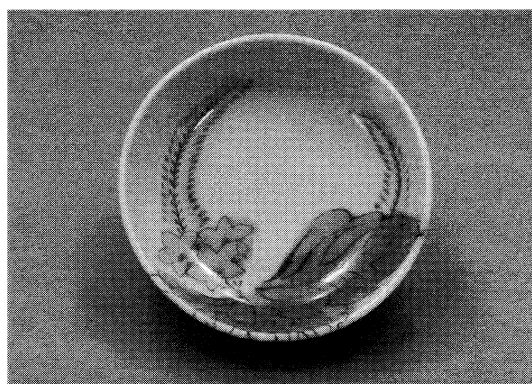


図 24 草花文小鉢  
日本 美濃 20世紀前期(明治43年)  
H:4.4 MD:12.0 FD:5.8





図 25 石版赤絵人物図徳利  
日本 美濃 20世紀前期 (明治34年)  
H:2.0 MD:8.2 FD:4.9

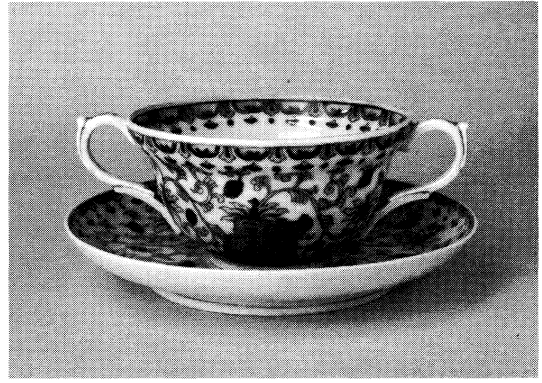


図 26 銅版染付スープカップ&ソーサー  
日本 美濃 20世紀前期 (明治35年)  
H: 5.1 MD: 9.6 FD:4.2 (カップ)



図 27 染付煎茶碗  
日本 美濃 19世紀前期 - 中期  
H: 5.6 MD: 6.5 FD:3.5



図 28 摺絵染付鉢  
日本 美濃 19世紀後期  
H: 7.4 MD: 25.1 FD:14.0

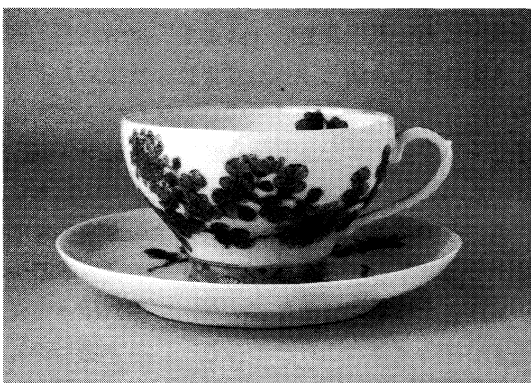


図 29 染付菊花文カップ&ソーサー  
日本 美濃 加藤五輔 19世紀後期  
H: 5.6 MD: 9.3 FD:4.6 (カップ)

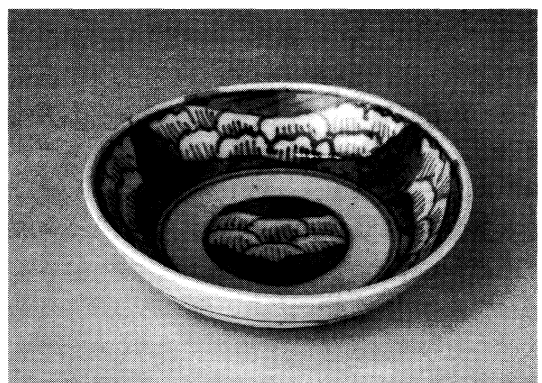


図 30 染付鉢  
日本 肥前 18世紀中期 - 後期  
H: 3.6 MD: 14.1 FD:9.4